

目次

凡例 8

序章 9

一 『源氏物語』の近代 9

二 谷崎源氏の概要と本書の構成 10

三 本書で明らかにしたいこと 17

研究編 21

第一編 昭和源氏の実像 23

第一章 二つの谷崎源氏 25

はじめに 25

第一節 削られた『源氏物語』——〈旧訳〉にまつわる言説 28

第二節 〈新訳〉草稿に見える書き入れの実態 31

第三節 新たなる禁忌のコード 33

一	玉鬘と光源氏	33
二	齋宮女御と光源氏	38
三	紫の上と夕霧	40
四	空蟬と河内守	41
第四節	「文学的翻訳」というあり方	42
一	禁忌三箇条という視点の限界	42
二	訳者谷崎のねらい	44
おわりに		45
第二章	許されざる表象	51
はじめに		51
第一節	「脊髄」から「小骨」へ——削除の全貌を概観する	54
一	訳出開始から刊行完了に至る経緯	54
二	藤壺以後の削除の実態	57
第二節	「忌避」の基準は一貫していたか	64
第三節	少正卯を誅殺せよ	69
第四節	谷崎源氏という表象	76
おわりに		79

第三章 再び『源氏物語』を「現代」に「移植」する…………… 87

はじめに…………… 87

第一節 国定教科書論争と〈旧訳〉…………… 88

第二節 内在する藤壺——「若紫」巻まで…………… 92

第三節 国家主義の象徴を削除する…………… 95

第四節 「完全」な〈新訳〉に宿る〈旧訳〉の「余臭」…………… 99

おわりに…………… 105

第四章 文体を一新する…………… 111

はじめに——玉上回顧録の投げかけるもの…………… 111

第一節 削除箇所復活、敬語の削除から「です」「ます」調採用へ…………… 113

第二節 助力者たちの進言と谷崎…………… 117

一 山田の校閲態度…………… 117

二 玉上の進言①——物語音読論の立場と敬語…………… 122

三 玉上の進言②——「若い読者」への目配り…………… 130

おわりに…………… 131

第二編 翻訳と創作の交渉…………… 139

第一章 「文学的翻訳」の創出

はじめに

第一節 編集者の目算——幻のプランから、谷崎源氏へ

第二節 訳者の意図——『源氏物語』の「行き方」を再現する

一 「現代」の「日本文」の弊害

二 その〈感情〉は誰のものか

第三節 国文学者の慧眼——「現代の小説の姿」を尊重する

第四節 「源氏のエキスパート」の後悔——最後の「文学的翻訳」

おわりに

第二章 創作の内幕——『猫と庄造と二人のをんな』論(一)

はじめに

第一節 小説の執筆と、源氏訳と

一 『猫と庄造と二人のをんな』に影響したのは「若菜上・下」巻か

二 源氏訳の進捗状況

第二節 「帚木」巻から『猫と庄造と二人のをんな』へ

一 雨夜の品定めに灑がれた「非常なる興味」の行く方

二 左馬頭の体験談から「二人のをんな」の造型へ

第三節 単行本における削除

第四節 創作から翻訳へ	180
おわりに	186
第三章 典拠としての『源氏物語』——『猫と庄造と二人のをんな』論(二)	189
はじめに	189
第一節 典拠としての『源氏物語』	189
第二節 孤閨の嘆きを抱える前妻たち	193
第三節 前妻は救済されたか	198
おわりに	200
第三編 古典研究との往還	205
第一章 校閲者山田孝雄と『源氏物語』	207
はじめに	207
第一節 〈新訳〉草稿上の山田の書き入れ	207
第二節 国体論者、山田孝雄	211
第三節 戦後の山田の『源氏物語』へのまなざし——〈新訳〉草稿に見える注釈態度	213
第四節 山田の源氏学——富山市立図書館山田孝雄文庫蔵自筆原稿との比較を通して	219
一 山田孝雄の『源氏物語』主題論	219

二 山田孝雄の源氏学

おわりに

223 221

第二章

岡崎義恵の「谷崎源氏」論

はじめに

229

第一節 岡崎義恵「谷崎源氏論」とその影響

231

第二節 岡崎の批評、その後

239

第三節 〈流麗体〉の真骨頂

242

おわりに

247

第三章

国文学者と時局

255

はじめに

255

第一節 更衣が参上したか帝が渡御したか

256

第二節 戦時下の敬語論

262

第三節 近代注釈における〈御前渡り〉

264

おわりに

267

資料編 273

一 國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿 山田孝雄書き入れ旧訳本 本文加筆箇所対照表 275

二 富山市立図書館山田孝雄文庫蔵自筆原稿「源氏物語は何を目さしてかいたか」翻刻 355

三 最後の〈旧訳〉——『藤壺——「賢木」の巻補遺』のヴァリアント 413

終章 447

初出一覧 453

関連資料一覧 455

一 谷崎源氏以前、および同時代の文献 455

二 谷崎源氏にまつわる先行研究 458

三 参考文献 461

あとがき 467

一、本書では、昭和一四年（一九三九）一月～昭和一六年（一九四二）七月刊行の全二六卷『潤一郎訳 源氏物語』を〈旧訳〉、昭和二六年（一九五二）五月～昭和二九年（一九五四）一二年刊行の『潤一郎新訳 源氏物語』を〈新訳〉とし、〈新訳〉草稿の旧訳本とは弁別する。

一、谷崎源氏以外の谷崎作品の引用は基本的には『谷崎潤一郎全集』全二六卷（中央公論新社）に依るが、小説『猫と庄造と二人のをんな』に限っては適宜初出のテクストを使用する。また、第三編第二章の翻刻と漢文の引用箇所ならびに固有名詞以外の旧字は新字に改めた。

序章

一 『源氏物語』の近代

日本の文学史上、『源氏物語』以上にその功罪が取り沙汰されてきた文学作品はないだろう。時の帝、一条天皇が「この人(紫式部)は日本紀をこそ読見たるべけれ。まことに才あるべし」と感嘆を漏らして以来、この物語には唯一無二の権威が付与されてきた。「源氏見ざる歌詠みは遺恨ノ事也」という言葉に象徴される歌詠みの素養として欠くべからざる宝典は、連歌、謡曲などの文学から絵画や芸能に至るまで芸術のジャンルを越えて多大なる影響を及ぼし、各時代の為政者が自身の統治力を示すための文化装置としても機能したのである。他方でこの物語は「淫蕩の書」として主に儒学者たちの批判を浴びてもきた。紫式部が狂言綺語の罪で地獄に堕ちたとする紫式部墮獄説は良く知られており、それに拮抗する形で紫式部観音化身説や源氏供養なる営為もが生み出されることとなった。虚構の物語をめぐって種々の営みが創出されたという事実こそが、作品に宿る根源的な力を何よりも証明している。

近代国家という枠組みが形成されて以降、この物語は日本文化のプライオリティを西欧諸国へ宣伝するプロパガンダとしても積極的に活用された。明治一五年(一八八二)、外交官であった末松謙澄の手による英訳はその好例である。⁽⁴⁾ その一方で、大正期に入ると、ついで日本の地を踏むことのなかった英国人の手による英訳が誕生する。九年をかけて上梓されたアーサー・ウェイリー訳『The Tale of Genji』は、西洋におけるジャポニズムの潮流と、それに続くモダニズムの芸術運動に乗って好評を博した。⁽⁵⁾ そのインパクトは大きく、所謂逆輸入のような形で日本の文壇にも影響を与えたのであった。昭和期に入り(純日本的なるもの)を盲目的に追い求める時代が到来すると、古典は「日本